

アッシジ ASSISI 人口 2万8千人

イタリア共和国 ウンブリア州

一度しか訪ねたことがない街を紹介するのは恐縮だが、アッシジには特別な思いがある。出かけたのは、1991年の夏。この時は地中海沿いにギリシアからスペインまで横断する旅行で、途中イタリアから北上し首都ローマから、内陸のこの街に入った。

ローマ中央駅(Termini)から

前の晩、ローマの中央駅で国鉄(FS)アッシジ行きの切符を購入した。「アッシジ」と単調な声で行き先を告げると、窓口の男性はすぐに気づかず、一呼吸おいてから「アッシージー」と抑揚をつけて私に確かめるように復唱した。どうやらこの街をイタリア人はアッシージーと呼ぶらしい。

翌朝、普通電車でウンブリア州の入り口フォーリーニョまで行き、乗り換えて昼前にアッシジの駅前に降り立った。この日も晴天が広がっていた。駅から見上げる丘上の街までは、バスに乗る。それを待つ間、ひなびた駅前に聞こえてきたのは、何と女性たちのタガログ語だった。この日8月15日は、聖母マリア昇天の日で国民の祝日だった。イタリアの家庭で家政婦として働くフィリピンからの出稼ぎ者が、休みをもらいこの街に詣でているのだった。

バスは坂を登り、サンタ・キアラ聖堂の前で停車した。このバス停近くに、目当ての宿『ホテル・ローマ』があった。昼時でフロントには人がいず、脇の食堂を覗くと家族スタッフが卓を囲み正餐をとっていた。さすが「食」の国である。しかし、遠来の客に気づいたのか、年配の男性がすくっと立ってフロントまで来てくれた。こうして今夜の宿を確保した。

その足で目の前のサンタ・キアラ聖堂へと

足を運ぶ。会堂内部を散策していると聖母昇天を記念するミサが始まり、司祭が同じ僧服の少年を従えて会堂の奥へと進んで来た。左右の少年は、我々にはとても芳しいとは言えない、牛骨を焼く臭いかと思える香の煙を振りまいている。その後で、司祭の朗々とした聖書の音読が始まった。敬虔な祈りを捧げる信者に遠慮して、会堂を去った。



写真1 丘上の街 アッシジ

午後1時を過ぎ、街はシエスタで静まり返る。そこでこちらでもホテルで昼寝と相成った。3時近く、けたたましい雷鳴に驚いて起きた。一雨あった。夏の半年ほとんど雨のない地中海性気候のこの土地で、どうして水が確保できるのか分かった気がした。

アッシジの街の起源は、古代ローマにまで遡(さかのぼ)る。宿から坂道を登ると、間もなく町の最上部に達する。そこに古代のアンフィ・テアトロと呼ばれた屋外劇場の跡がある。おかしなことに、楕円のアリーナは半分緑に覆われ、残りは後の時代に住居が侵入してきて、楕円の壁を残しながら住宅街になっている。また宿から北西に石畳の道を歩き、中心街のムーネ広場に出ると、正面がギリシア神殿のミネルヴァ教会が立っている。これも古代ローマ時代の神殿をのちにキリスト教会にした例だった。

フランチェスコの街を歩く

そしてこの街の中世。西暦1180年頃、ジョバンニ＝ベルナルドネという男子が生ま

れた。父ピエトロはこの街の裕福な毛織物商で、嫁いだ母はフランス出身で、母似のジョバンニはいつの日か、フランチェスコ(フランス人)と呼ばれるようになった。若き日彼は、隣町ペルージャ(あの中田英寿がいた街!)との戦いに参加、あえなく捕虜となり、帰国後病にかかり死線をさまよった。その回復後、何不自由ない暮らしをして来た金持ちの息子は、人が変わったように現世での欲を捨てた。13世紀初め、彼は豪華な僧服を着た教会の坊さんとは異なり、貧しい身なりでこの教えの祖であるキリストが歩んだと同じ道を歩もうとした。

幼なじみの友とも別れ、丘の中腹で廃墟となった粗末な教会の再建にかかった。それがサン＝ダミアーノ聖堂で、今もキアラ聖堂から下った所に修道院として存続している。その修道院まで、急な坂を下りる。当時、風変わりな人と思われたフランチェスコを、純粋な求道者として最初に理解した女性がキアラだった。生前のフランチェスコと共に歩んだ者の中で、その第一人者となった。彼女はフランチェスコの死後、生涯この修道院を守りこの地で没した。



写真2 サン・ダミアーノ修道院

学生時代に見た映画『ブラザーサン・シスタームーン』を思い出す。有名なイタリア人監督フランコ＝ゼッフィレリの制作だが、ヒットした『ロミオとジュリエット』の陰に隠れ、フランチェスコを描いた地味な作品だ。

広い草原にたたずむ廃寺で修道僧姿のこの人が石を積む場面が印象的だ。そこにかつての遊び仲間が次々とやって来る。「お前、気が狂ったのか」との問いに何も答えぬフランチェスコ。しかし最後にはその遊び仲間も世を捨て、ダミアーノに留まることになった。ところがアッシジの街からこの会堂に集まるものが増えると、従来 of 聖職者たちには脅威となった。そこで衝突が起こり、仲間が一人死ぬ。彼の純粋な思いは届かないのか。そう自問して、フランチェスコは仲間とローマに赴(おもむ)く。

時は中世キリスト教会の全盛期。法王(教皇)は飛ぶ鳥を落とす権勢を誇るイノケンティウス3世だった。きらびやかな宮殿の奥で、豪華な僧服を身にまとう法王を前に、粗末なボロ着姿のフランチェスコが歩み寄った。「私たちは間違っているのでしょうか。キリストは清貧を説かれたのではありませんか」と。映画は、これに感動した法王がひざまずき、フランチェスコの泥足に口づけするところで終わっている。これを池袋の映画館で見た……。

中心街のコムーネ広場近くに、フランチェスコの生家があった。記念の部屋があり、そこに蠟燭がともっていた。この辺りの坂道は迷路のようで、歩くのが楽しい。その道を上り下りした。下った所にある緑濃い広場の奥からクラリネットの音が響いて来た。サンタマリア・マッジョーレ聖堂の中だ。正面の大きな壁の真ん中に小さく穿(うが)った玄関に入る。兄弟ではと見える二人の青年がそれを吹いていた。脇のポスターに、今夕ここでコンサート開催とある。その後、街を歩いていて偶然通りかかった観光馬車の日本人ツアー客にこの話をすると私らも行きたいと言う。皆で出かけることになった。

翌朝、この街随一の名所である聖フランチ

ェスコ聖堂へと、ゆるい坂を西へと下る。ここでもわざと寄り道してわき道を上ったり下ったり。そこで、大柄なシスターに出会った。出て来た所の看板を見ると、フランチェスコ第二修道会ドイツ支部とある。彼女はキアラが創設した第二修道会に属するドイツ人尼僧と推察した。

聖フランチェスコ聖堂に詣でる



写真3 下の広場から見上げる聖フランチェスコ聖堂

坂道を下った所に、こちらに正面を向けた聖フランチェスコ大聖堂があった。白いロマネスク風の建物は、狭い尾根をまたぐように、それにそって奥へと伸びていた。この日も大勢の観光と巡礼の客が訪れており、聖堂前の広場はごった返していた。その中の一人となって中へと入る。会堂は上下二段となっており、上の会堂には初期ルネサンスの画家ジョットの「フランチェスコの生涯」を描いた28枚ものフレスコ画が描かれている。それを丹念に見たが、薄暗い聖堂内で今一つ明瞭でない。しかもジョットの作品にはどこか無愛想な印象がある。ここでもそれを拭えなかった。さらに下の会堂となると、天井が低いせいか、明かりはさらに乏しくジョットと同世代のチマブーエらの壁画も楽しめなかった。

それにしても、詰めかける人の多さには驚いた。外に出て明るい陽光の下で眺めると、この小さな町に相応しくない壮大な建物だ。フランチェスコが没して間もない1228年に

は、教皇の命で早くもその建設が始まっている。その後幾度かあった地震での倒壊を修復し今に至っている。

当のフランチェスコは、この建物を一番望んでいなかったのかもしれない。生前に自らの修道会の発展と会員の増加に相対した彼は、失明もあって次第に人を遠ざけるようになったという。大組織の長であるよりも純粋な求道者であろうとしたのだ。街の東、スバジオ山の中腹、カルチェッリの庵にこもり、苦行などを実践したという。そしてこの時見て来られなかったが、アッシジ駅の裏側にあるサンタマリア・デリ・アンジェッリ聖堂。ここはフランチェスコ昇天の場所だ。その聖堂の真ん中に最後の修行の場である庵ポルツィウンコラが収まっている。彼はあくまで質素と清貧を貫こうとした。いつの世でもそうだが、一度組織化されたものはそれ自体の存続と拡大が目的となり創設者の理想を失ってしまうことがある。フランチェスコはそれを嘆いていたのだ。

再びバスに乗って丘上の街を後にし、駅へと降りる。そのバスで英国人の小学校教師だという女性に、手に持った前売り切符はどこで手に入れた？と聞かれた。バスは前売りの方が安いとガイドブックにあった。そこで苦労してバス停近くのキオスクを探し当てたと得意げになって答えた。自分はまことに凡人だと思う。そんな私にとって、フランチェスコは、なぜか憧れる聖人ではある。

駅から乗った国鉄の列車を乗り継ぎ、この日はウンブリアの北、トスカーナ州のフィレンツェをめざした……。